

平成25年度  
入学試験問題

国 語

特待生  
前期

受験番号	氏 名

中村中学校



□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) ゾンブ|ンな働|きをみせる。
- (2) 市内は無料でハイ|タツする。
- (3) 車|が激しくオウ|ライする。
- (4) 順序はフド|ウですがそろっています。
- (5) 商品|をホウ|ソウする。
- (6) 組織|の解散はヒツ|シだ。
- (7) 先生|からロウ|ホウを手にする。
- (8) 小|さな犬をカ|う。
- (9) よくコ|えた土|地。
- (10) 大|きな紙に版|画をス|る。

〔二〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

文を改変、省略したところがあります。)

\*字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

自分は将来、どんな仕事につきたいのか。そのためには、どんな学校へ行って何を勉強すればいいのか――。そんなことを考え始めるのが、だいたい13歳くらいなのではないかと思えます。中学校の一年か二年生の頃ですね。このくらいの時期になったら、社会のことを大づかみに知っておくために、新聞を読む習慣をつけておいたほうがいいと思います。

新聞を読むことで、「ああ、今、世の中はこんなふうになっていくんだな」とか、「こういう方向に向かって動いているのだな」などと、自分なりに社会に対する判断をし、そのイメージをつかんでおくことができます。実はそれが、とても大切なことなのです。

中学生くらいの年代だと、新聞に書かれているような世の中の動きが、自分に直接関係してくる経験をするのは、あまりないといっているでしょう。遠い国で起こっている戦争も、政治家が国会で議論している内容も、選挙の結果も、経済の動向も、「別に自分には関係ないよ」と言ってしまうばそれまでで、問題なく生活していくことができるかもしれません。

ではなぜ、13歳のあなたが、新聞を読み、世の中が今どうなっているかをつかんでおいたほうがいいのか。それを、ぼく自身の経験から話そう。

① ぼくが小学校を卒業して中学校(旧制)に入学したのは、昭和11年のことでした。昭和12年に盧溝橋事件というのが起こって、今の呼び方でいうところの日中戦争(当時は支那事変と呼んでいました)が始まりました。

宣戦布告などというものもないうちに、どんどん戦争状態の中に入ってしまった、その最初の年が昭和12年です。その頃、ぼくは、中学校(化学ばかりの工業学校)二年、つまり13歳でした。

ぼくは、化学がわりと得意で、高等工業学校、大学と、化学系の学校に進んでいます。化学というのは、社会の動きとはあまり関係のない学問です。世の中で何が起きているのかに興味があっても、化学の勉強には差し支えがないわけです。

もうひとつ、中学校に入った頃から、文学に関心が深くなってきました。詩のようなものを書いたり、小説を読んだりすることが好きだったのです。こちらは趣味的にやっていました。

文学もまた、当時のぼくにとって世の中とは関わりのないものでした。世の中は戦争に向かって進んでいきましたが、ぼくはそんな流れとは無関係に、好きな恋愛小説などを読んでいました。詩

を書いたり本を読んだりすることは、ぼくにとって、世間と関係のないところに自分の世界をつくることだったのです。

上の学校に進むにつれて、化学に関する仕事で身を立たてようと思っうようになっていきましたから、10代のぼくにとって化学はいわば『本業』でした。そして、文学を一生のAにしていこうと思っっていました。

つまり、ぼくが当時、いちばん興味があり、一生懸命けんめいになっていた二つのこと——化学と文学——は、どちらも社会の動きに関係がないものでした。少なくともぼくはそう思っっていたのです。

だから、新聞を一生懸命読んだり、今がどうという時代であるかについてあれこれ考えたりということ、ほとんどせずに過こしてしまいました。

もちろん、戦争という現実の中で生きていたわけですから、今まさに戦争をやっている世の中というものと、まったく関わらずに生きていたわけではありません。

高等工業の学生になった頃には、勤労奉仕ほうしというものがありません。授業を受けるかわりに、河原の石を運んだり田んぼで作業を手伝ったりするのです。

大学に入ってから、工科大学でしたので、工場に行って大学の教授がやっている実験を手伝ったり、小さなプラント（生産のた

めの設備）をつくったりということをやりました。これは徴用動ちようどう員いんとって、職業をもっている人と同じように給料をもらっていました。

こういうことをしていたのは、もちろん日本が太平洋戦争に入ったからです。

② だから実際には社会の動きに関係していたわけですが、勤労奉仕も徴用動員も、やれと言われたことをやるだけですし、田んぼの稲刈かりとか化学の実験とかをやっているときに、それが時代の流れとか、社会の動きとかにつながっているという実感は如実じよじつではないわけです。

だから、自分個人こじんのやっていることと、そのときの社会との関係については、何も考えていませんでした。

自分と社会との関わりについて考えたことがなかったというのは、とても大きな失敗でした。今でも「あれはミスだったな、まずかったな」と後悔こうかいしています。

③ なぜかというところ、敗戦という現実に直面したときに、天地がひっくり返かるくらいの衝撃しょうげきを受けてしまったのです。ぼくの人生の中で最大の衝撃で、それを乗り越えるために何年もかかりました。

ぼくは日本が戦争に負けるなどということ、まったく予想もしていませんでした。それがある日突然、無条件降伏こうふくだという。そん

な馬鹿な、昨日までは絶対に勝つと言っていたじゃないかと信じられない思いでした。

昭和20年の8月15日に、動員先でみんなが集められて、玉音放送を聞きました。玉音放送とは、天皇が、日本は戦争に負けたのだということを知り国民に向かって宣言したラジオ放送です。

よく聞き取れない部分もあったし、ときどき途切れたりもしたけれども、聞いていると、日本が降伏したのだということはわかりました。

日本は負けたんだ——そのことを理解したときは、立っていられなくて、前につんのめりそうになりました。

なぜ、つんのめるほどの衝撃を受けたのか。

戦争中ぼくは、世の中の動きをまったくつかんでいなかった。自分の興味があること、自分の生活に直接影響してくることだけを見ていればいいと思っていた。だから、自分とは関係のないところで社会がひっくり返ると、お手上げになってしまったわけです。

自分にはどうにもならないところで、世の中が180度変わってしまう。そういう経験をすると、大きな衝撃を受けると同時に、生きていくこと自体が虚しくなってしまう。

玉音放送を聞いたときのぼくは、まさにその衝撃と虚しさの中に突然、ほうり込まれた状態だったのです。

そのとき以来、ぼくは今までつねにこう思ってきました。今世の中がどうなっているか、どんな方向に動いているのかを、いつも自分なりにつかんでおくべきだ。そうでないと、自分の意志とは関係ないところで社会に大変動が起こったとき、とんでもないことになってしまふぞ、と。

大切なのは、今の時代のすがたを自分で判断することです。

それが間違ってもかまいません。いつも世の中の動きを見て、考えて、「俺はこう思う」とか「私はこんなふうにとらえている」などという自分なりの理解をもっておく。そうすれば、何か大きな変化が起こっても、少なくとも敗戦のときのぼくのように、途方に暮れて何が何だかわからなくなるということにはならないのではないでしようか。

世の中には「どうにもならないこと」というのがあるんだなあ、というのが、戦争に負けたときのぼくの気持ちでした。戦争に負けたのはぼくのせいではないし、戦争をやめることに賛同したわけでもありません。でも、ぼく個人がいくら頑張っても、敗戦という現実には変わらないわけです。

けれども、戦争中にぼくが、もっと世の中の動きを知る努力をして、社会に対するイメージを自分なりにもっていたとしたら、ここまで虚しい気持ちにはならなかったのではないかと思うのです。た

とえそのイメージが正しくなかったとしても、「自分の判断はここが間違っていたんだ」「自分としては精一杯考えたつもりだったけど、まだ足りなかったな。甘かったんだな」などと思うことができれば、

B

ようになって前につんのめる、というようなことにはならなかったのではないかと思います。

⑤ こうした反省から、ぼくは戦後、新聞を一生懸命読むようになりました。時代のすがたを大づかみにするには、それが手っ取り早い方法だからです。自分の専門の分野とは関係ない記事でも、ちゃんと読む。そして考える——戦後のぼくは、とても高い温度で新聞を読んできたと言っていていいと思います。

ぼくにとっての敗戦のような出来事が、これから皆さんの身にも起こらないとは限りません。それが何であるかはわかりませんが、自分とは関係のないところで世の中がひっくり返って、その影響を自分も受けてしまうという出来事が、いつ降りかかってくるかわからないのです。ぼくが、13歳になったら新聞を読んだほうがいいと言っているのは、そのためです。

(吉本隆明『13歳は二度あるか』)

問一——線①について、ふさわしい敬語表現に直したものを一

つ選び、記号で答えなさい。

ア、お話しされましょう      イ、お話しいただきましょう

ウ、お話ししましょう      エ、お話しになりました

問二——線a「差し支えがない」、b「身を立てよう」の本文

における意味をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

a 「差し支えがない」

ア、関心がない      イ、不都合がない

ウ、意味がない      エ、面白くない

b 「身を立てよう」

ア、収入を得て生活しよう      イ、誰かの役に立とう

ウ、将来の夢をかなえよう      エ、一生懸命に努力しよう

問三——Aに入る言葉を、本文中から漢字二字でぬき出して

答えなさい。

問四 ——— 線②とありますが、実際は何がどのように「関係し

ていた」のですか。それを説明した次の文の（ 1 ）く

（ 3 ）に、本文中の言葉を用いて適当な説明を補いなさい。

（ 1 ※四十文字以内 ）や、（ ）

2 ※四十文字以内 ）が、（ 3 ※五字以

内 ）という現実社会の動きと関係していた。

問七 B に入る表現として適当なものを次から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア、あげ足をとられた      イ、二の足をふんだ

ウ、足もとをすくわれた      エ、足をひっぱられた

問八 ——— 線⑤「こうした反省」とはどのような反省ですか。最

も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、社会に対するイメージを自分なりに持っていれば、戦争に

負けなかったかもしれないという反省。

イ、社会の動きに関わる勉強をしていれば、もっと世の中の役

に立てたかもしれないという反省。

ウ、毎日、きちんと新聞を読んでは、敗戦を予期すること

ができたかもしれないという反省。

エ、世の中の動きを知る努力をもっとしていれば、敗戦という

現実を冷静に受け止められたかもしれないという反省。

問五 ——— 線③とありますが、当時の筆者が敗戦によってそれほ

どの衝撃を受けてしまったのは、どのような姿勢で社会と向

き合っていたからだと筆者は言っていますか。そのことを説

明した一続きの二文を本文中からさがし、最初と最後の五字

を答えなさい。

問六 ——— 線④と同じような状態を表す慣用的な表現を本文中か

ら一語でぬき出しなさい。



問九 ———線⑥とありますが、ここでの「温度」とはどのような

意味ですか。最も近い意味の言葉を選び、記号で答えなさい。

ア、確率      イ、意欲      ウ、頻度<sup>ひんど</sup>      エ、品質

問十 ———線⑦とありますが、筆者がこのように主張するのは

なぜですか。その理由を説明した次の文の（ 1 ）と

（ 3 ）に、本文中の言葉を用いて適当な説明を補いなさい。

（ 1      1      ※四十文字以内      ）ということがい

つ起こるかわからないので、そうなったときに、（ 2

※二十文字以内 ）ことにならないようにするためには、新聞を

読み、（ 3      ※三十五文字以内      ）べきだ

から。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

\* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

小学校三年生の「ぼく」は立ち入り禁止の札の立つ空き地で子どもたちが遊んでいるのを見かけた。その中には同級生の原田もいた。どうやらがっちりした体格で荒々しい顔つきの五、六年生の少年がリーダー格らしい。

次の日も、また次の日も、原っぱには子供たちが集まっていた。

五、六人から、多いときには十数人が来ていたのだ。

そのリーダーは、例の五年生か六年生位の奴である。みんな、リーダーのいう通り、上体をかがませて膝を持った者の背中を順番に飛んだり、輪を棒のようなもので押して回しながら走ったり、腕立て伏せをやったりしているのだ。その中にはいつも原田がいた。

ぼくは一度か二度、おとなが、

「こら！ そんなところで遊ぶな！」

と、わめくのに出くわしたことがある。

するとかれらは、リーダーの、逃げろ！ という命令一下、外へ走って行くのだった。それを見るとどなったおとなのほうも、どういふつもりか、わっはっはと笑うだけなのである。そしてそのおとながいなくなると、かれらはまた戻ってくるのであった。

「ぼくはこのことを、学校でいいふらしたりはしなかった。喋れ  
ばみんなの噂になるだろうし、原田自身も困った立場になるに違  
いない。ぼくは原田には何の義理も恩義もないけれども、ぺらぺら  
と他人のことを喋りまくるような人間にはなりたくなかっただけで  
ある。」

ただ、当の原田には学校で忠告してやった。

「きみ、あんなところで毎日遊んでいて、勉強はどうなってるん  
だ？ それに、今に近所の人もうるさくなるだろうし、学校にも

I ぞ

「いいんだよ。ぼくはかぎっ子だから、自分で自分の面倒位

II よ

原田は、意外にしっかりした口調で答えたのだ。「昼間は昼間。

ぼくは塾へ行ってないしね。夜は自分で勉強してるんだ」

「……………」

「あいつ……………ぼくらにいろいろ遊びを教えてくれる奴ね、テツオっ  
ていうんだ」

原田はつぶけた。「テツオが教えてくれるまで、ぼくはあんな面白  
い遊びがたくさんあると知らなかった。それに、いろんな本を貸  
してくれるんだ。マンガや小説で、これも面白いんだよ。何かと元  
気づけてもくれるし」

「……………」

相手がそんなつもりなら、もう何をいっても仕方がないだろう、  
と、ぼくは諦めたのであった。

そして。

a

ぼくが思っていたように、原っぱでのことは問題にな  
り始めた。近所のお母さん連中があれこれいうようになってきた—  
と、母から聞いたし、学校でも原田が他のクラスメートに何かい  
われているのを何度も目にするようになったのだ。

ときには学校からの帰り、原っぱのロープの外に何人が並んで、  
中の様子を眺めているのを見掛けたりもした。

このままでは、きっと、何かうるさいことになっただろう。

だが、そのうちにマンション建設が開始された。ロープの代りに  
高い仕切りが作られ、中には機械類が入って、ごうごうがりがりと  
音を立てるようになったのだ。

b

そうになると、もう中には入れなかった。原っぱでの、  
テツオとやらいうリーダーにひきいられての子供の一団の遊びは、  
消えてしまわねばならなかったのである。

そのころからぼくは、原田が変わってきたのに気がついた。マンショ  
ンの建設が始まる少し前には、原田はみんなにいろいろいわれるよ  
うになっており、いじめの対象になるのは

c

時間の問題だっ

たのだが……妙みょうに落ち着おいてきて、おかしなことをいわれても相手にせず、それでもひやかそうとする者がいると、みんなの前で、ここで決闘けつとうしようといい、なぐり合いもするようになったのである。もっとも、いつも原田が勝つとは限かぎらなかった。三回さんかいに一回は負けたのだ。これでつねに勝かちていけば、またそれはそれで憎にくまれたであろうが……ほどほどに勝かちったのである。のみならず、学校の成績はまあ普通ふつうでも、体育のときには宙返ちゆうへんりをやってみせたり大車輪だいぐるまをやったりして、先生をびっくりさせたり、絵もうまくなった。人気マンガの主人公の絵など、誰だれも真似まねできなくなったのだ。

③ 不思議なことだ、と、みんなはいった。そしてぼくは思うのだが、普通ならそんな風になればなるほど、みんなのけものにされるところなのに、何なにとなく一目置ひとまきかれて、誰も妙なことをいわなくなつたのが……<sup>④</sup>ぼくにはさらに不思議だった。

ぼくは現在高校の二年生だ。よく知られた進学校に通っている。そして原田は、あまり有名でなく進学校でもない高校に行っているが……聞くとところによればスポーツが達者でサッカーか何かの選手であり、美術展にはたびたび入選し、高校生の発明展覧会で賞ももらったりして、その学校のホープなのだそうである。<sup>⑤</sup>原田は原田としての人生を歩もうとしているのだろう。

今になって考えれば、原田はあの原っぱでの遊びで、テツオに教

えられ鍛きたえられているうちに、だんだん変わってきたのではないか……テツオとはそういう魔力まじりよくか超能力ちゆうのうりよくみたいなものを持った奴やつだったのではないか——という気がする。そして、テツオと遊んでいた他の子供たちにしても、テツオによって何かの能力を開発されたのではないだろうか。原っぱでの、ぼくなどから見れば馬鹿馬鹿しい遊びあそびをやり、テツオの感化を受けて、そうなって行ったのではなからうか。

ぼくがこんなことをいうのには、理由がある。

この間ぼくは、学力コンクールを受けるためによその高校へ行った。その高校の傍そばに、空き地があったのだ。大きな空き地で、草が茂しげっていた。

空き地にはロープが張られ立入禁止の札があり、その中で子供たちが走り回っていた。そのリーダーは、小学校の五年生か六年生の——あいつだった。テツオだったのだ。いくら見ても間違まちがいない。あのとときのテツオだったのである。あれからもう八年も経たつのに……

★ テツオが、子供たちをリードしていたのだ。

信じられなければ、信じてくれなくてもいい。けれどもそうだったのだ。

きっとテツオは、年をとらない……空き地があればそこに出現して子供たちのリーダーになる 1 なのだ。そして、一緒いっしょに

遊んだ子供たち、そうしようとした子供たちに力を及ぼし、子供たちを変えようとしているのだ。

3 なのだ。ぼくはそうだと信じるのである。

(眉村卓『原っぱのリーダー』)

問一 —— 線①とありますが、それは「ぼく」がどのように思ったからですか。六十字以内で説明しなさい。

問二 I、II に入る語の組み合わせとして適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、I 知れる II 見れる

イ、I 知れる II 見られる

ウ、I 知られる II 見れる

エ、I 知らせる II 見せる

問三 a、c に入る語を次から選び、それぞれ記号

で答えなさい。

ア、ほとんど イ、けっして

ウ、もちろん エ、やっぱり

問四 —— 線②の「うるさいこと」とはどのようなことと考えられますか。次から選び記号で答えなさい。

ア、建設機械が入って工事の騒音がいつそう大きくなること。

イ、注意を守らない子どもたちがよけいに騒ぎ出すこと。

ウ、注意のしかたがだんだん激しくなっていくこと。

エ、大人たちが注意してめんどうなことになっていくこと。

問五 —— 線③、④とありますが、「みんな」と「ぼく」はそれぞれどのようなことに対して不思議と言っているのですか。違いがわかるように九十字以内で説明しなさい。

違いがわかるように九十字以内で説明しなさい。

問六 —— 線⑤とありますが、「ぼく」は「ぼく」でどのような生活を送っていると思われるか。その答えとなる次の文の

(1)、(2) に入る言葉を答えなさい。

有名な(1)に通い、(2)中心の生活を送っている。

問七 〜〜〜線A、Bとありますが、「ぼく」から見れば「馬鹿馬

鹿しく」、原田から見れば「あんな面白い」遊びとはどのよ

うなものです。具体的に内容が書いてある一文をさがし、

その最初と最後の五字を答えなさい。

問八 ★に入る語を次から選び、記号で答えなさい。

ア、あのときのままの

イ、りっぱに成長した

ウ、目つきだけは変わらない

エ、いくぶん無口になった

問九 123 には「人間」「存在」のど

ちらかが入ります。その組み合わせとして適当なものを次か

ら選び、記号で答えなさい。

ア、1人間 2人間 3存在

イ、1人間 2存在 3人間

ウ、1存在 2人間 3存在

エ、1存在 2存在 3人間